

令和 5 年 11 月 12 日現在

機関番号：37107

研究種目：基盤研究(C) (特設分野研究)

研究期間：2017～2022

課題番号：17KT0138

研究課題名(和文) ビジュアル・ナラティブを用いた同期的対話によるグリーフケアの生成

研究課題名(英文) Generation of grief care by synchronous dialogue using visual narrative approach

研究代表者

濱田 裕子 (Hamada, Yuko)

第一薬科大学・看護学部・教授

研究者番号：60285541

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：子どもを亡くした家族の悲嘆に伴う体験を明らかにするために、子どもを亡くした親を対象に、ビジュアル・ナラティブ法(描画インタビュー)によって、子どもとの関係の過去、現在、未来と悲嘆について調査した。16人から収集した描画56枚とその語りのパターンと事例分析を行った。子どもとの関係性の変化は、過去と現在では、「包む」「見守る」から、「包まれる」「見守られる」など、主体と客体の逆転現象が特徴であった。

また、悲嘆を共有する場の生成と場の意味の探求を目的に、期間中に10回分かち合いの場を開催した。場がもたらす意味は、「ひとりじゃないと思えること」「悲しみを表出する場」「子どものことを語る場」であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子どもを亡くすこと自体が稀になった現代において、子どもを亡くした親の悲嘆は計り知れない。本研究は、既存のインタビューやアンケートなどを用いた悲嘆(グリーフ)研究とは異なり、亡くなった子どもと親との関係性を描画によって明らかにし、さらに、ビジュアル・ナラティブが今後のグリーフサポートにつながる示唆を得た。また、グリーフの会という遺族の分かち合いの場を作ることによって、その場の持つ意味を探求し、子どもを亡くし、孤立しやすい遺族に対するサポートに還元するアクションリサーチとして社会的意義も大きいと考える。

研究成果の概要(英文)：To explore the experiences accompanying the grief of families who have lost a child, a visual narrative method (drawing interviews) was used to investigate the past, present, and future relationships with the child, as well as the grief, targeting parents who have lost a child. A total of 56 drawings were collected from 16 participants, and pattern analysis and case studies were conducted based on their narratives. The changes in the relationship with the child were characterized by a reversal of roles between subject and object, such as transitioning from "embracing" and "watching over" in the past and present, to being "embraced" and "watched over." Furthermore, to create a space for sharing grief and explore the meaning of that space, ten sharing sessions were held during the period. The meanings generated by these spaces included "feeling that one is not alone," "a space to express sadness," and "a space to talk about the child."

研究分野：小児家族看護学

キーワード：子どもの死 グリーフ 悲嘆 グリーフサポート ビリーヴメントケア ビジュアル・ナラティブ 描画法 アクションリサーチ

1. 研究開始当初の背景

子どもの死は「複雑な悲嘆」を助長させる因子であり（Worden, 2003）、我が国でも子どもを亡くした遺族に対するケアの必要性は認識されているものの、病院では子どもの死と同時に、医療やケアの対象は「死亡退院」という帰結となり、遺族ケアまで行われず、家族は孤立化しやすく、医療のみならず社会的課題といえる。

これまで、我が国においてはグリーフケアそのものがほとんど行われていないため、研究としては、病児の親の会や任意団体の取りくみの報告（才木, 2002、納富他, 2007、樋口他, 2012）や、子どもを亡くした家族の語りを客観的に分析したもの（三輪, 2010）はみられるが、ナラティブ研究として、聴き手と話し手の同期的、同調的な対話から分析したものはない。

筆者はこれまで、子どもを亡くした家族のビリーブメント・ケアニーズを明らかにし（濱田, 2014～2016）、ケアプログラムについて検討してきた。子どもを亡くした遺族を対象とする研究の場合、ケア（実践）を切り離すことは現実的ではなく、ビジュアル・ナラティブを用いて、研究と実践を循環させるアクションリサーチを行うことは、あらたな研究分野の改革となり、グリーフに限らず、弱さや悲しみを抱えながら共在する社会的課題へのアプローチの一翼を担う研究になると考えた。

2. 研究の目的

- (1) 子どもを亡くした遺族の悲嘆に伴う体験を、ビジュアル・ナラティブを用いた同期的対話によって明らかにすること
- (2) 遺族の悲嘆を共有する場を作り、その場のもたらす意味を明らかにすること
- (3) 遺族の語り（Narrative）からサポート資源（resource）を構築し還元することである。

3. 研究の方法

(1) ビジュアル・ナラティブによるインタビューとイメージ画の共有を実施・分析した。

- ①対象：子ども（19歳未満）を亡くした親
- ②調査内容：“私と子ども”との関係の「過去」「現在」「未来」、「グリーフ」についての半構造化インタビュー、語りの内容の描画、イメージ画を共有し、共同行為としての物語を聴く
- ③分析方法：1例毎に描画とインタビューデータを突き合わせて、各事例で起こっている関係性の変化を分析するとともに、全体として親子の関係性の類似性に基づき象徴的に抽出した。

(2) グリーフの会（集い）を開催し、参加者の会話内容や流れ、参加観察を行った。

- ①研究期間中10回開催したが、当初は対面開催であったが、コロナ禍となり延期やオンライン開催とした。
 - ②調査内容：グリーフの会での発言、会話内容、参加観察記録（観察内容：服装、表情や態度などの様子、他の参加者やファシリテーターとの交流内容）。
 - ③分析方法：グリーフの会での対話や交流におけるナラティブデータと参加観察から、遺族におけるグリーフの会の場がもたらす意味を抽出した。
- なお、研究に先立ち、所属機関の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1) 研究参加者の概要およびビジュアル・ナラティブ分析

研究参加者は、母親14名、父親4名であり、年齢は30代～50代（母親一人のみ80代）であった。こどもの死因は小児がんが7名、先天異常や先天性疾患9名、事故や突然死2名であっ

た。また子どもの亡くなった年齢は、8か月～17歳で、亡くなってからの経過年数は、1年2か月～8年（上述の80代の母の場合は、50年経過していた）。

参加者18名の描画データは、1人あたり3枚（過去・現在・未来）と、10例目からはそれに「グリーフの時」を加え（ビジュアル・ナラティブによるもの語りの共同生成により、グリーフの時が必ず語られることから、当初の過去・現在・未来の描画の後に、グリーフの時を描画してもらった）、4枚となり、計62枚であった（1名の父親のみ「未来」は描かれなかった）。描画とその後のインタビュー時間は、各85分～230分であった。

① 親と子の関係性のイメージ

描画データは、具体的な親子の日常風景が描かれたものから、丸やハート、花や風景などで抽象的に描かれたものなど様々であった。1事例毎の描画データとインタビューデータの分析は、本報告では割愛するが、全体的な関係性のイメージについて述べていく。

子どもとの関係性の「過去」「現在」「未来」：子どもとの関係性の「過去」は、親が子を“包む”“見守る”“ともにある”や子ども自身の存在を太陽や花に例えて描かれていた。「現在」は、“子どもに包まれる”“見守られる”“導かれる”など、「過去」との関係性と比べると主客の逆転傾向を描かれたものが多かった。「未来」は、“ともにある（一緒）”、“対等”、“つながる”、“再会”として描かれたものが多く、明るい色や親の希望や「ありたい」親子像（家族像）が描かれた。

「グリーフ」の様相：「グリーフ」の描画の特徴は、過去・現在・未来の3枚の画は明るい色であったのとは対照的に、黒やグレーなどの暗い色で描かれ、自分（主体）が描かれていないか、小さな存在としてのみ描かれていた。共通する様相は、“暗闇”“出口が（見え）ない”“空洞”“枯れる”などで表現されていた。しかしながら、言語で表現するには余りある参加者の心情や真っ暗闇の状況が描かれ、これまでインタビュー以外で着手されることのなかった研究であり、結果として貴重なデータとなった。

② “未来”を描くこと、語ることの意味と共同生成者としての研究者

本研究は、ビジュアル・ナラティブの手法を用いて、研究参加者の描画データを媒介とし、3項関係（語り手と媒介項と聞き手の関係）の中で対話が行われた。「過去」や「現在」「未来」を描いてもらって、その画を媒介に、その画にまつわる体験やエピソードをとおして、研究参加者のNarrativeを聴く。半構造化面接で研究者が質問を投げかけ、それにこたえるという一般的なインタビュー手法では言語化が難しい状況であっても、特に、グリーフを抱えた人へのアプローチとして、ビジュアル・ナラティブの手法は、研究のみならず、実践（ケア）にもつながっていくと考えられた。

特に、亡くなった子どもとの“未来”を描くということは、子どもがいない今、一人であることは難しい。ある参加者は、“未来”の描画を終え、研究者との対話後に、「あの子と私の未来、正直考えたことなどなかったけど、そうか・・・考えても良いのかと嬉しかった」と語った。やまだ（2018）は、イメージや物語の力で、今ここにはないものを表象することができ、不在のもの、未来が、逆に現在をつくることができる」と述べている。Yuval-Davisもまた「『アイデンティティとはナラティブであり、人々が自分自身と他者に対して、自分が何者であるのかを語るストーリーである』しかしアイデンティティは流動し、『今ある自分と生成していく自分、現在の帰属と帰属への願望とを抱き合わせた過程として、常に自らをつくりだしている。』」（Riessman2014）一人では描くことのできない、亡き子との未来も、その語りの共同生成者として対話する人（今回は研究者）がいることによって、理想やこうありたい未来を描

くことができると考える。そして、未来が逆に、今「現在」をつくる（生きる）ことができるようになり、それがグリーフケアにつながっていくと考えられた。

しかしながら、本研究は、研究者であり看護者でもある筆者が、インストラクションし、その対話の上に成り立った結果であり、誰でも同じようにインストラクションや関係性を作れるとは限らないことが限界である。今後は、研究者自身が、どのように関係性を作って行ったのか、共同生成の場の作り方も分析していくことが課題である。

(2) 遺族の悲嘆を共有する場づくりとその運営について

①遺族の悲嘆を共有する場（グリーフの会）の運営

研究期間中、グリーフの会を計 10 回開催した（表 1 参照）。当初は場を設定して、そこに集う対面での参集形式で行っていた。研究として取組み始めた 2017 年度～2 年間は、想定どおり参集形式で行えたものの、2020 年以降の Covid19 感染拡大により、参集することが困難になり、2020 年 3 月開催は急遽中止した。しかしながら、既に申込み者もおり初参加の希望者も 4 名おり、本研究課題である“グリーフケアの生成”の観点から、オンラインでの開催を検討し、初参加の方に限定して、オンライン開催を試みた。

それ以降、感染状況に鑑み、オンライン開催が主となった。オンラインによる開催は、対面開催とは違ったメリットもあることが事後アンケートや参加者の反応などから明らかになった。

オンライン開催のメリットとして、遠方からの参加が可能であること、参加しやすいこと（当日会場まで足を運ぶこと自体が大きな壁となる遺族もいる。乳幼児がいても参加しやすい）、参加のスタイルを参加者が選ぶことができる（カメラ・マイクのオン・オフなども自由として、話すことができなくても聞くだけの参加もしやすい）ことなどであった。

参集時は福岡での開催となるため、参加者は福岡県近郊に限られていたが、オンライン開催時には、関東や関西、東北、国外からの参加もあった。また、申込時や事前面談時に、「まだ話せないけど、聴くだけでも参加したい」と言う方もいて、カメラオフ・マイクオフで参加されたが、チャットへの書込みで参加された方もいた。

オンラインのデメリットとしては、きょうだい児の参加ができないため、きょうだい児のプログラムをのぞむ声には応えられなかったこと、遺族同士の交流が参集形式に比べると制限があり、お茶の時間や終了後にちょっとしたおしゃべりがしにくいという点が課題であった。

一方、参集形式では、参加者が集うことで、参加者同士の交流が自然に生まれる良さがある。話に詰まって涙する人に、隣にいる参加者がそっと肩に手をおくなどの場面もみられ、会が終わって、個別に話をしてみたい人に、話しかける人もいて、参集ならではの交流ももてる良さがあった。さらにきょうだい児が参加できることは、グリーフを抱えるきょうだいにとっても学生ボランティアや他のきょうだいの交流をとおして、感情を表出する場にもなっていた。ただ、親のプログラムと並行するので、親の様子を気にする子どももおり、場の設定や子どもの年齢によっては時間配分なども工夫する必要があった。

表1. グリーフの会「空にかかるはしご」開催概要

| | | 参加者 | スタッフ | 開催形態 |
|----|----------|-------------------|------|-----------------------------------|
| 1 | 2018年3月 | 家族11組20名(大人16/子4) | 21名 | 参集形式 |
| 2 | 2019年3月 | 家族11組17名(大人13/子4) | 12名 | 参集形式 |
| 3 | 2019年9月 | 家族7組18名(大人10/子8) | 13名 | 参集形式 |
| 4 | 2020年6月 | 家族4組4名(大人) | 2名 | Covid19禍のためト ライアルとしてのオ ンライン |
| 5 | 2021年3月 | 家族9組9名(大人) | 4名 | オンライン |
| 6 | 2021年9月 | 家族9組9名(大人) | 4名 | オンライン |
| 7 | 2022年3月 | 家族10組10名(大人) | 5名 | オンライン |
| 8 | 2022年9月 | 家族7組7名(大人) | 4名 | オンライン |
| 9 | 2022年12月 | 家族3組3名(大人) | 4名 | 参集形式 |
| 10 | 2023年3月 | 家族4組4名(大人) | 4名 | オンライン |

② 悲嘆を共有する場のもたらす意味

悲嘆を共有する場のもたらす意味として、子どもの死自体が稀になり、孤立しやすい家族が、「一人じゃないと思える場」であり、「普段は蓋をしている心の蓋をあげ、悲しみを表出する場、泣いても良い場」、「子どものことを語れる場」であった。

遺族の悲嘆を表出し共有する場としてグリーフの会は今後も継続していく必要が示唆された。今回運営や実施をしていく中で、課題として、必要とする人への広報、きょうだい児向けのプログラムの実施、参加者数が多い場合の対応、開催頻度を増やすことの検討、事後フォローの必要な方への対応、運営側スタッフの人材確保、人材育成、スタッフへの教育支援があり、さらに今後の研究・実践につなげていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 濱田裕子、藤田紋佳、森口晴美 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 子どもを亡くした遺族への関わり～遺族から学ぶグリーフケア～ | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 グリーフ&ピリープメント研究 | 6. 最初と最後の頁 69-75 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 2件/うち国際学会 1件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 濱田裕子 |
| 2. 発表標題 遺族と子どもとの関係を紡ぐビジュアル・ナラティブとグリーフケア |
| 3. 学会等名 第20回日本トラウマティック・ストレス学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|-----------------------------------|
| 1. 発表者名 濱田裕子、藤田紋佳、森口晴美、野田優子 |
| 2. 発表標題 子どもを亡くした家族から学ぶグリーフサポート |
| 3. 学会等名 日本家族看護学会第28回学術集会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 濱田裕子、藤田紋佳 |
| 2. 発表標題 子どもを亡くした親は子どもとの関係性をどのように紡いでいくのか～描画にみる過去・現在・未来とグリーフの様相～ |
| 3. 学会等名 第3回グリーフ&ピリープメント学会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 濱田裕子 |
| 2. 発表標題 ビジュアル・ナラティブのグリーフケアへの可能性：シンポジウム “ ビジュアル・ナラティブの実践性と多様性 ” |
| 3. 学会等名 日本質的心理学会第16回大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 濱田裕子、藤田紋佳、森口晴美 |
| 2. 発表標題 子どもを亡くした家族と子どもの関係性～視覚イメージで語る現在、過去、未来～、 |
| 3. 学会等名 日本家族看護学会第26回学術大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Yuko Hamada |
| 2. 発表標題 Palliative Care for Children and Grief Care for Families : Practice, Research and Education |
| 3. 学会等名 2019 International Conference of the Research Institute of Nursing Science (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 濱田裕子 |
| 2. 発表標題 ビジュアルをい媒介に紡がれる子どもとの物語：共鳴するグリーフ |
| 3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 濱田裕子、藤田紋佳、北尾真梨 |
| 2. 発表標題 子どもを亡くした母親のグリーフ体験～社会との関係の中での亡くなった子どもの扱い方～ |
| 3. 学会等名 日本家族看護学会第24回学術集会 |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|-----------------------------------|----|
| 研究分担者 | 北尾 真梨 (Kitao Mari) (80778811) | 神戸大学・保健学研究科・保健学研究員 (14501) | |
| 研究分担者 | 藤田 紋佳 (Fujita Ayaka) (10437791) | 九州大学・医学研究院・助教 (17102) | |

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|-----------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 森口 晴美 (Moriguchi Harumi) | | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|